

朝日文芸欄の一面

助 川 徳 是

1

「沈黙の塔の上で、鴉のうたげが酣」なる明治末年は、すでに日露戦争前後に於て倫理的な理想主義乃至宗教的な精神主義への方向と、破理顛実的な文学的自然主義への方向とに分裂していたロマン的な個人主義が、重苦しい体制や習俗の圧迫の中で、「陰暗な彷徨」^①をつづけ、次第に日本的なレーベンス・フィロゾフィーに統合されて行く過程であった。

ポーツマスの「屈辱条約」が、維新以来の国民的ヴィジヨンたる富国強兵の呼び声をその達成に於て破った時、兵のみ強くして民なべて貧しいという現実の前で絶望した民衆は日比谷に暴発した。開戦と共に逸早く戦場に送られる兵士に向つて、「諸君が湖北の野に奮進するの如く、吾人も亦悪制度廃止の戦場に向つて奮進せん。諸君若し死せば諸君の子孫と共に為さん。諸君生還せば諸君と与に為さん」^②と美しく戦闘的であつた明治社会主義は、自らの内なる両頭の蛇を統一できず、その一人、木下尚江は「新紀

元」の終刊に「慚謝の辞」を書いて挫折した。労働問題は都市や鉾山に於て過熱し、足尾、別子の暴動は軍隊の出勤を招いた。農村共同体の封建関係は動揺し、高落松太郎は「小作人が地主を見ること仇敵の如く」と記し、脱営者の頻発した軍隊では、鉄砲自殺した一軍曹は「長者為下務下者為上務」^③と抗議した。これらの諸事象のなかに、国家意識の基底に及ぶ割れ目を入れることを恐れた体制側の危機意識は、戊申詔書によつて生活の規範を呈示し、国と家とを同心円に重ねて、個人の自覚を家族主義に包摂し、その上にそれを国家主義へ統一しようとした。

すでに絶対主義的天皇制の国家制度と、独占的集中の段階における資本主義の社会制度の下で、寄生ブルジョアとしての知識人たちは、個人主義的ヒューマニズムの側に立つ市民意識の深化に伴つて体制に対する批判と懷疑を深め市民的な自由を拡充するかわりに、この市民的自由への抑制をたんに外面的な卑俗な粹にすぎないと観念してそれを超越し、厳肅に且つ純粹な「内面的王国」を形成する知的エリートたらんとしていた。従つてかれらの多くは、大逆

事件に代表される帝國主義体制の強化の只中にあつて、自我の中に自然をみながら、壁のように動かぬ現実を感じながら、主に人格的な内部の倫理性によつてそれを克服し浄化してゆくところに普遍的な人間性のより真実なありかたを求めたのであつた。かつての透谷の一つのフィクション、「想界に抑制なし」は、ここに蘇えるのである。

こういう内省的な自我凝親は、市民意識の浸透を通じて近代的な個人を定着する代りに、個人を内面的に直接的に「自我」として把え、こうした「自我」の拡大と絶対化をとおして、逆にあたえられた現実の絶対肯定をみちびくような方向づけを保つた。従つて古田光氏がいう「一切の既成をありのままに肯定しながら、そのなかに近代的な個人を定着させようとする」矛盾に充ちた試み（日本観念論哲学の成立）への克服は何よりも先ず、体制や習俗の背後にある国家権力の本質と日本近代の半封建関係に対する徹底した批判を前提とするものであつた。明治末年の知識青年の思弁においては、ありのままに言えば、それは半ば果されかけた。稿者は「朝日文芸欄」の本質的な問題性を、あえてここに求める。

この、東京朝日新聞が、明治末年の知識人の関心を集めた「文芸欄」の紹介、論考は、すでに遠藤祐氏及び熊坂敦子氏に手を尽した論文がある。^④ここに敢て蕪雑な討尋を加えるのは、先に求められた問題と共に、大正の教養主義の

トレーガーたちが、自然主義思想をどのように克服しようとしたかを正面から捉えたいという気持を捨て切れぬからである。

ともかくも自然主義思想は、啄木の所謂明治日本人の「最初の哲学の萌芽」であるが故に、日本の現実に密着し、田中王堂の言う、現実の世界の「動力を発見」しようとする姿勢に於てラディカルであつた。「文芸欄」に拠つた漱石門及びその周辺の人々は、主に明治末年に於て廿代の後半を迎え、自然主義の主唱者たちより十年若い世代、藤村操の死を深い共感を以て体験し、樗牛によつて「我」の自覚に達し、綱島梁川の宗教的精神主義に心を洗われ、「時代閉塞」の状況に青春を生きた世代であつた。かれらの苦渋に充ちた足どりは、自然主義思想との対決を必然とし、その超克乃至は回避の諸相は、教養主義の母胎であつた筈である。従つてここでは、そのメエトルたる漱石の発言にあえて焦点を合せず、当代記者の所謂青年大学派の論者を主軸とし、適宜にその他の人々を加えて、かれらが当面する課題にどのように肉迫したかを見たいと思う。

もとより、明治四十二年十一月二十五日より、四十四年十月十二日に至るまで、文芸欄は延六百八十七日に及び、うち百三十六日の休載を含みつつも、題目総数三百七十七篇を数える多彩な論文を所載している。^⑤それらのうちの若干を挙げるに止まるであらうこの小稿が全体の像を著るし

く歪めるだろうことは、ここに断るまでもない。稿者は、「文芸欄」が自然主義思潮とのからみ合いの中にあげる無数の泡立ちの中に円錐を投じつつ、問題の本質に一步でも近づくことを期する他はないのである。

①安倍能成「明治思想界の潮流」

②平民新聞十四号、明治三十七・二・十四、「兵士を送る」

③麻布歩兵第三聯隊第十一中隊軍曹中山源明の辞世

④遠藤祐氏「漱石とその周辺」(国文学昭和三九・二)「漱石主宰の朝日文芸欄」(「岩手大学文学部研究年報」昭和三九・三)

熊坂敦子氏「漱石と朝日文芸欄」(日本女子大学紀要昭和四十一・三)「漱石の『朝日文芸欄』細目」(文学昭和四十一・二)

最後の細目について瑕瑾を指摘するのも気が進まぬが、私の調査との違いを摘記しておく。四十三年四月一日、吹田蘆風「マクス・チルネル」は「マクス・スチルネル」、四十三年十月七日「意匠の矛盾」は「意志の矛盾」、四十四年八月二十九日「内生活直写の文学」は私の見た版では「内生活真写の文学」であった。但し「三太郎の日記第一補遺」の中では「内生活直写の文学」と改められている。

⑤この数は海外文壇の逸話紹介記事である小宮豊隆その他の「柴漬」を含まない。内容によって大別を試みれば、文学思想関係百八十篇、絵画関係四十一篇、音楽関係三十二篇、演劇関係三十三篇、彫刻関係六篇、能楽関係五篇、建築関係四篇、随想及び雑篇七十一篇となる。

2

告白とは自然主義的文学的営為の方法であると同時に目的であった。そこでは内なる自己が外なる自己に対立し、

この自己認識の二重構造を照射するものは、科学としての生物学であった。この人間認識の日本の特色は、内なる自己が諦念と共に眺められることにある。「何が自分をして諦めさせるのだろうか。……若し自ら潜して聡明ということ

①を許されるなら、聡明だからである」

そこには何よりも先ず他人と関連することによって、人間としての自分に関連するというダイナミックな人間観が存在しないと同時に、かれらが力を注いで克服しようとした硯友社文学の基底にある小説神髄の人間観——人間を何よりも先ず情慾的存在と規定した生物学的進化論の継承が認められる。「吾が身と猿とをエックス光線に照合すれば、同型の髓骨現れて軀た浅まし」^② こういう無力感乃至虚無感の中に於て、たとえば島村抱月は、自分が確とした人生観を持ち得ぬ理由は、方便としての普通道徳を超えることの出来ない自己愛即ちエゴが、いかなる道徳にも先行するという知識に依るとした。そのようにして、永遠に静止し、諦念と共に静観されるべき自己を告白することは如何にして可能であるか。この矛盾に充ちた問題を自然主義は強引に文芸の倫理として乗り越えたと見る外はない。疑惑不定の状況こそが人間に於て最も本質的なものであり、その「虚飾なき」再現のみが「真実」であるという抱月に於ては、「告白」がそれ自体目的として定立されているのである。従って抱月に於ては「第一義欲」が虚妄として排除し

切れず、「自己」という其の内容は何と何だ。自己の生を追うた行き止りは何うなるのだ」という苛立ちが諦念を突き動かす。

安倍能成は、このデテルミニスティックな人間観の不毛を見抜き、「此の有様が一步を墮すれば……唯このまま死んでしまうことを願うような倦怠に陥るのではあるまいか」と警告し得たが、それはかれが自然主義者のペシミズムに色濃く染め上げられるには尚若い年令を持っていたというよりも、ラファエル・フォン・ケーベルの弟子たる開明性を、スピノザ^④の学習のうちに自得したこと的一面でもあろう。

朝日文芸欄の評家にあつては、多くこの自然主義的発想の外に立って、告白という方法を形而上的問題として論じた。乃ち、告白者の主体とその内容については、「品性の下劣なものは其下劣な根性を有の儘にさらけ出したって何等の値打ちもない」（四方太、仮装文学を排す）と述べ、近頃の文壇は「トラジカルな心の奥底から湧く実感想」を以て金科玉条としているが、元来悲観は「人間を以て宇宙の中心又は最終と心得る原始時代の迷信の遺物」だとし、「呼吸器・消化器の健康があれば悲観は起らぬ」と珍論を展開ひろげて、「病者の告白に価値なし」（桐生悠々、独りよがりの文壇）と断じた。これらを論外として、告白の動力を求める者は、何等かの欲求或は憧憬がなければ告白

は起り得ず、結局何等かの宗教的色彩を帯びなければ、何等の価値はないものでなからうかと質し、作家の生を有の儘に描くべきものだとする文芸上の議論ならばともかく、「懷疑して何物をも信ずることが出来ないから告白する。

そうして告白は唯行方処を告白すれば宜しいという様な一種の人生観上の問題となると」承服出来ぬ（小宮豊隆、抱月氏の為に惜む）と核心を突くと共に、告白の問題を積極的な人生観上の問題としてとりあげた。この線上に安倍は、「兎も角も何等かの人生観がなくして、其の人に文芸観のありやうがない」という原則を確認した上で「疑惑不定の状態には寧ろ一言を出すことも一語を洩らすことも出来ぬというのが実際の心持ではあるまいか。」と迫った。こういう討究の行きつく所は、ともかくも「自然主義が人生に触れた痛切な問題を取扱ふと云う以上は、解決にせよ、無解決にせよ冷やかな認識上の閑葛藤を離れて、生存の意義そのものを指さなければならぬのは明らかである。」（魚住折蘆、真を求めたる結果）という新しい理念の要請となり、懷疑を告白することが、無解決に諦めきれぬか、他の方面を摸索していることだとされ、疑惑不定の極まる所に、積極的な人間観を定立し、自然主義的虚無と傍観的態度の克服が志向されるのである。

自己を生かすことが白樺派の旗印であつたとすれば、「真を描く」ということは、もとより自然主義が「生命であり

モットー^⑧であるとする所であつた。しかし、その「真」の構造は、自然主義の灌漑する全流域に於て統一されてあつたというよりも、様々に転換造成され——同じ主張者も時と共にその意義を変えろという不定な或は柔軟な性格を持った。従つて茲に挙げようとする二、三の例は、描写の目的たる「真」の見易い一端にすぎず、すでにその全的把握を成し遂げた先学の研究書のミニチュアにも値せぬものであろう。

例えば、長谷川天溪の初期の論文に於ては、「真」は、「宇宙万物の実体」であり、人事及び自然界の「隠れたる実質」として「真実体」という物質概念を伴う觀念であつた^⑨。ここに生ずる疑問は次の三つに集約されるであらう。もし「真」がそういう「真実体」であるなら、それを捕捉するための方法としての芸術の方法は、自然科学の方法とどう違うか。「骨組」乃至「真実体」というが、何をそれと見るかは、作家の主観に委ねられるのか。自然界と人事との間に於て「実体」は等質又は等価なのか。これらの疑問が、予想外に後まで持ち越されたことは、相馬御風が第一の問題を問題として正面に引き据えながら遂に答へ得ていないことによつても分る。この問題を体系的に捕えたものは、やはり抱月四部（又は五部）作のうちの最初の二つであらうが、「文芸上の自然主義」に於ては第二義とせられる社会問題、科学、現実という諸目的が集合して、どうして第一義の真に転化するのか、能成の「近代文芸の研

究を読む」によつて鋭敏に問われたことは、己に知る如くである。只、この論に於て「真」の分析は意外に手薄なものがあつて、「深奥な自然の味」として神秘の相を帯び、現実や自然に超越的なものだとして規定されれば、これを理想というとも神というとも名前の差違ばかりではないかという追究を蒙つたのも亦当然であつた。この論のもう一つの弱点は恐らく自然主義の現実觀として呈出された「肉感はずなわち實際哲学が証して最も確實な知識とするもの、之に訴へる現実是最も真なるべき理である。肉感に近づくだけ、其の刺激は真実になり、随つて痛切になる。卑近の境は最も多くの人が最も多く実験する現実であるし、自然物は最も明確で且つ虚偽なき樸直な現実である。」とあるあたりにあり現実と真との即の構造が最も多く批判者の疑義に触れたのではないか。ともあれ、この抱月論の補綴と見られる「自然主義の価値」では、文芸が美を目的とするという大前提が認められ、その成分として快樂と實際的意義を樹てるといふ常識論への後退が見られ、自然主義が真を特に標榜する所以は、「在来の文芸が漸く套窩に陥つて單なる空想の遊戲、形似の遊戲のみとするに對し、反動的に他の一面を提起して文芸に實際的意義の価値加わさるべからざる所以を明にしたに過ぎぬ」と、それ自身消極的意義を示すに至つた。この論義は文学の功利説などではなく、むしろ人間に於ける部分真実である悲劇美を描くことによ

つてカタルシスを志向する文学との対比の上に、人間の全
円を描くことによって生に対する冥想と思考をうながす文
学を提示したアラン^⑨の文芸観に近い一面があったのではな
いかと思考する。写実主義との差違も評論史を貫流して問
われ、抱月にあつて支配的な主張であつたものは、拵え物
でない人生を味わせ、無条件主義的ありのままに徹し、書
かれざる全体としての人生を暗示することにあつた。御風
もこの線上に態度の差異を論じ、写実主義は単に知識が教
える自然そのものを、客観的に観るが、自然主義は、自己
と生命を同じくするものとして、厳肅に之を観ずるものだ
とした。著明な川合貞一による論難は「隠れたる半面が現
実である如く顕れたる半面も現実ではないか」という疑義
に起り、物的現実には「増さず減さぬ人生」ではない、従つ
て「人生の一面識より入って如何にして生の真の本体が揣
摩され得るか^⑩」と衝いたものであつた。哲学的思弁に長じ
た彼等が、整合した論理を以て問題を人生論的に把え直す
際に、自然主義本来の問題である芸術論は面白味を失うこ
とも否めない一面であつたのである。能成も前掲文に於て
「自然主義の価値」を難じ、無条件主義も結局は理想であ
つて、時代の生活や精神と交渉することが自然主義者の
「ふれた」という意味ではないか、現代の現実を以て人生の
全体を示すことに自然主義の使命はあらうと論じた。

朝日文芸欄は、この真をめぐつて甚だ攻撃的な態度を示

した。「現実の真」が主観的であることに多くの論難は集
中し、そこには科学的冷静さも哲学的沈思もない、只「自
分の唯今の経験」を真として強調するのみであるとし、更
に、この「私の唯今」は、物質的、肉体的、官能的、具体
的、刹那的な人生観にのみ裏づけられている。この感覚
的、刹那的な主観は到底持続する筈がなく且つ未来を律し
得ないとして斥けた。(能成、空疎なる主観)それ自身典
型的な様式を持つこの思弁に更に一つの特徴を加へれば、
この論は、自然主義的誤謬、主観の受動的な空疎を自己の
静観と沈思によつて克服せよという要請がある。そこには
抽象的思弁と形而上的考究によつて新らしき主観に到達し
得るという無垢なまでの内省への期待がある。要するにか
れらは、かつてのロマン主義や自然主義が逢着した虚無感
や宿命観を、主に自我の内面的な自覚を深めてゆくことに
よつて超克し、この生動化を図つたのであつた。そのため
には、一度び意識された自我の本能的自然性を人格的倫理
性によつて、或は超人格的な宗教性によつて圧殺し、専ら
内省の厳肅主義と純粹主義によつてその権威づけを果そう
とするのである。

プラグマチックな視野からは、善や美に憧憬し信頼する
ことが出来なくなつた人間が何故に真にのみ執着するの
かと問い、現代思潮は最早昔日の自然科学的世界観などに抱
泥はしていないし、科学は人間の全的経験を取扱うもので

はない、人間のための真理のみに意義があると論難が起つた。(太田善男、自然主義愈窮す。)

この論の粗大さは反論を呼び、自然主義の勢力は「社会的風潮として気分」として毫も衰えていない、それが現代の科学的、唯物的、現実主義の思潮の産物である限り、自然主義的傾向は社会から跡をたたぬであろうとする反撥が生じた。(折蘆、自然主義は窮せしや)この魚住文については、他で詳述したから、^⑩反復を避けたいが、この唯物科学的思潮に対する魚住の解折が、「人間を生物視して其靈性を拒否する事によつて」、「人の動物性を解放」し、「宿命説によつて人の道德的責任を解除する事」によつて「折柄生存競争に忙がしくなつて自己存在の外に顧みるところを欲しくなくなつた時代の人心に投ずるものである」とする所を以て見ても、一方に於て太田論を批判すると共に、自然主義を他方に於て揶揄する両刀の刃であることを再認したい。^⑪魚住文は自然主義の擬制の真面目を鋭く衝き、「主観の自由なる活動、統一ある世界観」への翹望を語り、結論として「自然主義は無論結構なものではない。然し社会の実力として時代の感情生活を背景として存立している限り、決して窮して居らぬ、従つて吾等の文明も亦遠い。」と反語的な弁疏をしめくくつた。

太田は懲りずまに、科学の現実^⑫は現実の影である、主観から切り離れた純客観の事物は人間に於て存在しないとし、

文芸を応用科学とするの不可を説いた。(自然主義と現実)又、安倍は、現実の真が何であつたかを再論し、(まことからうそ)「その重点が主として性慾描写におかれたことは、性慾の問題が万人に普遍であつたからで、自然主義の現実^⑬は主観的な所、時代的な所があつたことは蔽ふべからざる事実であつたと再論した。こうして、ともかくも、現実乃至真は「動かす可からざるもの」である禁制を解かれる方向に向つた。と同時に文学が現実と人間の相互孤立を克服する課題は、全く手つかずに切りすてられたのであつた、と言う他はない。

日本自然主義が一面に於て浪漫主義的性格を併有したことは、それが「個人主義に基盤を置いた自我意識の強烈な覚醒^⑭」を根本的性格としたことにおいて知られる。只、浪漫的自我の覚醒と高揚ないし強調は、天皇制と臣民道德という強力な否定原理の制空権の下にそれが果されようとする限り、かかる覚醒が深まれば深まるほど絶望と諦感とを呼び起すという構造を持つことは否定出来ない。自然主義者の自我の絶対視その結果としての主体性の獲得がしばしば自閉的破滅的に傾むいたのはこのために外ならず、感覚的閉鎖的なその自我膠着が他我への連帶の道を鎖したのももとより自明であつたのである。然しだからといってその惨酷なまでの自我凝視が遂に不毛な観念的追求であつたというような断定は排除せざるを得ない。この自己主張が徹

底する限り、その否定原理との対決はそれなりの形で果されずにはおかなかったのである。

批判者としての文芸欄が、自我よりも個性という言葉を多く用いたことに注目しよう。それは、自我乃至自己という二重構造の呪縛を解き放ち、より軽快にIchなりIchなりを抱擁することに依って前時代の桎梏を打ち破ったのではないか。しかもこの個は唐木順三氏が鮮やかに問題化したように、人類と個性、普遍と個を直結させ、中間としての種—国家、社会、政治、経済又は民族と氏族を切りすてた個であつた。自我から個性へ—その転移の上に、全体と世界の中に個を掌握すること、それが明治から大正への一つの転位であつたことに問題がある。

「今迄何人地上に人間が存在していたか知らない。今後又何人地上に存在するか知らない。しかし同一の個性を有する二人の人の地上に存在し得ないことは断言することが出来る。一人の個性より他のどの個性を持つて減じても零にはならない。又マイナス許りにならない。」（武者小路実篤、賞翫者と批評家と創作家に）この明朗な個への信奉から、「個性の發揮」が文芸の目的であると措定される誠に滑らかな文脈。そして次のようなオプティミズムがこれにつづく。「個性を發揮する事によつて作品の範圍が狭くなることはお互の個性にとつて仕幸なことである。かくて分業が行われ進歩してゆくのである。」或は又、自然主義の

文芸を機械的文芸の名に於て葬り「個性と詩」を認めよと叫ぶものがある。（小林愛雄、機械的文芸）頽廃や悲痛や孤独が思索と経験の結果として、襲うならば、それを回避するな。然し、それ等の個性の住家を破壊することを懼れよと呼ぶ。（痴郎、田舎・田舎者・田舎文学）阿部次郎のこの論は、自然主義的心情が個性の尊嚴という心情—それは誠に異質なものである—によつてのり超えられた一つの典型であらう。

もとより、自然主義的発想に近い自己も繼承されて問題になった。それらを摘記すると、前述の「自己を静観」せよ（能成、空疎なる主観）と説くものを初めとして、人生の光明に至りつく前に「自己を呪阻せよ」（愚徳・さつま汁）とする。荷風の「冷笑」には、周囲に対するデイスイリュージョンがあつても自己に対する幻滅がない、自己の空疎に対する悲愁を以て「自己を見つめよ」（蒼瓶、冷笑を読む）同じく、現代人は前代を批評してそれを誇としたが、現代を批判したかと問い「自己を批評」せよと言う。（能成、批評と生活）等々。まだある。「吾々は何方を向いても機械の音の絶えずがたがたする間に住んでいる。この喧ましい雑音のなかに交つて、成るべく内容の豊富な生活をし、出来るだけ自己を拡大しようとするには緊張した神経と白熱のような情意を以て、絶えず自己を働かさなければならぬ。」（泣菫、対話）自己を働かす—勿

論これには、何処へ、如何にという問が欠落している。さらにたとえば能成は、内的経験の切実が新しい内的世界を現出することを説いて、高山樗牛、清沢滿之、綱島梁川及び自然主義をその切実さを認めて一本の線につなぎ、「自己の生活を奥深くたど」れと叫ぶ。(論壇の近時) こういう観念的な自己追究に一つの方向を与え、自己主張の宿敵を措定したものは、魚住の「自己主張の思想としての自然主義」であつた。くどくどしい引用を重ねたのは、それが如何なる周囲を持つものであるかを明らかにしたいためである。

最近森山重雄氏はこの魚住文の「思想善導的なオプティミズム」を指摘すると共に、「家」の倫理的道德的擬制としての側面との自覚的なたたかいを自然主義作家がたたかわなかつたとし、啄木の戦いの先駆性を強調された^⑮。確かに聴くべき精緻な論理であるが、明治末年の体制の支配は道德的擬制としての家とのたたかいを圧殺しないではおかなかつたのだから、その強力な支配のうちにあがつた波頭をどうあり得たかという可能性に於てとらえることは強ち付会の論ではないのではあるまいか。例えば明治四十三年九月号のホトトギスが発禁になつたのは、一宮滝子の「をんな」が、儒教主義に馴致された女子の道德を破壊するものとされたからである。この時ホトトギスの小説月評をしていた魚住が「言はず」とした真意を氏はどう見られるで

あろうか。

魚住がこの一文の中でフェータリスティックな現実的科學精神と自己拡充の精神の結合として自然主義をとらえ、この矛盾の奇なる結合の「共同の怨敵」として「オーソリティ」の存在を指摘したのは、魚住自身の思索の歴史から言えば三十八年五月六日の田中き多子宛書簡以来の否定的發展である。^⑯「今日のオーソリティは」「国家である」という認識を可能にした魚住の観念的苦闘を思うが故に魚住文の先駆性を謳う愚はもとより避けなければならぬが、五月の宮下大吉等の逮捕にはじまり、翌年一月死刑判決に發展する社会状況の中で書かれ發表された(啄木の「時代閉塞の現状は發表されたものでない」ことを思つて魚住の沈黙した所に可能性の数々を数えるのは誤りであろうか。

体制や習俗の背後にある国家権力の本質に対する徹底した批判なしに、一切の既成をありのままに肯定して近代的な個人を定着することの不可能なことは、ここで最も本質的な問に達したと思われる。魚住は、自然主義が国家主義と遂に対決すべき宿命を担いながら、姑息にもその野合を企てたといつて天溪、花袋、泡鳴を痛烈に攻撃している。森山氏も言うごとく、「この時はじめて『人生觀の論』としての自然主義論から進みでて、『オーソリティ』すなわち『国家』という大状況の中での認識が可能となつたのである。」「明治社会主義の『薩長政府』の『道義的惡』を匡

す「志士仁人」の蜂起待望や、富者の「悔改」論に比してそれは先駆的であり、啄木文の組織的考察を産む重要な一石であつたと思う。

- ① 島村抱月「序に代えて人生観上の自然主義を論ず」
- ② 長谷川天溪「幻滅時代の芸術」
- ③ 安倍能成「近代文芸の研究を読む」
- ④ 安倍能成家所蔵本の中に、能成が自筆でカントとある大学に於ける研究テーマを、スピノザと書き改めたものがある。
- ⑤ ③と同じ。
- ⑥ 島村抱月「文芸上の自然主義」
- ⑦ ②と同じ。
- ⑧ 相馬御風「文芸上主客両体の融合」
- ⑨ Alain; Tragedy and wholly Truth (英訳本による)
- ⑩ 川合貞一「自然主義」
- ⑪ 稿者「魚住折蘆」国語と国文学(昭三九・七)
- ⑫ 臼井吉見「大正文学史」では魚住をして、「自然主義を積極的に肯定しようとしたもの」とある。
- ⑬ 吉田精一「自然主義の研究」下巻
- ⑭ 唐木順三「現代史への試み」
- ⑮ 森山重雄「実行と芸術」の問題」・文学(昭四二・七)
- ⑯ ⑪参照。

3

自然主義運動の本質的諸問題に文芸欄の評家がどのように対応したかに就ては、既に些か見る所があつた。では、かれらはその他の先行文学及び思想或は同時代文学及び思想には、どのように対応したであろうか。この問題をかれ

らの評価の問題としてしなれば、そこに著るしい特色が三つほどある。即ち、第一に、かれらが、かれら自身の批評的基準を決定し又は擁護するものとして、明治期のどの時代よりも恣意に海外の文芸及び思想を導入しいわば研究的態度を以て楽々とそれを受容しその文化的多様性を誇示したこと。第二には海外と国内とを問わず、評価の対象としての文芸及び思想に所謂一代目知識人に決して見られなかつた驚ろくべき自信を以て対し、そこから自分が好むが儘の意味を抜き出すことに於て主体的であると共に、どんな誤読も恐れなかつたこと。第三には評価を通じて自分の文芸観乃至思想の体系化を志向する緊張と執着が見られず、逆に評価のための準備の不足ないし無努力を余りにも卒直に認め、その卒直さに寧ろ重い意味を見出そうとしたこと。第三の点は敢て例証しない。

第一の点については、例えば文芸欄創設以来半年の間に紹介された海外文学哲学の属目を一部羅列することで容易に例証出来るであろう。即ち、イプセンの「ジョン・ガブリエル、ボルクマン」、アルツイバーセフの「サニン」、ハウプトマンの「寂しき人々」、ワーズワースの詩、ポーリス・ザイツェーフの「アグラフェナ」「静寂」、アンドレーフの「人の一生」「アナテマ」、ウェブスターの「フマルフィル夫人」、アドルフ・バルテルスの「現代の独逸詩」、ハウプトマンの「沈鐘」、マーテルリンク、アナトールフラン

ス及びその「短篇傑作集」、ダスンチオ、フレデリックマ
イヤースの論文、マイエルの「四大小説」、マックス、ス
チルネルの「唯一人と其所有」、ゼームスの「プラグマチ
ズム」と「真理の意義」、エミル・ライヒの「国民の成
功」、アセニヤム、誌の匿名批評、ブーダアマンの「漂流
児」、メルヒオル・レンギエルの「タイフン」、スピノザ。

其の他、唐木氏を摸放して言えば実に其の他。そこには、
花から花へ移り舞う蝶のように蜜を集め、主体的にその群
落の中から一つの花を古典として選び出す姿勢の欠落した
教養派が、型を嫌って個性の多彩を好む、批評的であつて
創造的ではない態度が立ち現れるのを否めない。それが教
養として誇示される時、凡そ次のような批評を生む。天弦
の物質的人生観に対する主観の苦悶などという概念はもう
古い。「そんなことは既に十九世紀の中頃にテニスンがい
ンメモリアムで歌っているではないか。」(太田善男)
「彼等(自然主義者の愚論暴論粹碎するには一部のレッシ
ングの『ハムブルと劇評論』又はエッケルマンの『ゲーテ
対話』があれば沢山だ。(中略)一日蠅のような自然派文
学を生噛りするより、語学でも勉強して先づホメール、ダ
ンテ、ゲーテ、シュクスピアなどから研究してかかる方が
為めになる」(片山孤村、駁駁論)これらが教養派の悪し
き一例であることは勿論だが、その個性の多彩を好む態度
が、実に次のような議論に結びつくすると看過することが

容易ではなくなる。「吾々が今日務むべき事は伝統ある組
織の下に安んじて棲息して、そして個性の自由を没却し
ないことである。自我の權威を認めてそして相互の間に新
しい統一を拵へてゆくことである。政治の専制はなくなつ
た。宗教の専制もなくなった。然るに思想上に於てのみ何
で絶対的の統一を造る必要があるうぞ。相互の寛容相互の
推重、任意的なる協力、男らしき譲歩。是等が思想界をし
てアナキイに陥らしめない楔である。」(太田善男、個性と
統一)正に百花繚乱の文化の花園への非論理な期待。ここ
でイメージされているのは折衷主義ですらない。初めから
共存を予定されている思想こそアナキイではないか。
メレジュコフスキーの「背教者ジュリアノ」の読後感とし
てヘレニズムとヘブライズムの「二元的渾一よりは、二元
的分離や矛盾の方」に「より大きな興味を覚えた」(能
成)と言う訳知り顔、「甲を求める人は甲にゆけ。甲に乙
を求める勿れ。乙に甲を求める勿れ。」(実篤)と言う「分
業」への安住。その基盤とするものは文化的に拡大した
が、思想追究の力は衰弱したと見る外はないであろう。

第二の特徴はかれらの批評そのものに現れている。二葉
亭に対しては「その写真と現実暴露との底には作中の事件
や人物に於て無頓着であり得ずに、常に一種の熱情(皮肉
でも冷笑でも憤慨でも)を以てその中に動いている著者の
梯」を見出し、「一種の理想家」を見る。(阿部次郎、二葉

亭全集第一卷）或は、又二葉亭の「文学は男子一生の事業に非ず」をその儘に受取り「何処かに余り軽すぎる響がある。遊んでいる処がある。鈍刀でも鈍刀でも真向に振り翳して駆け廻る勇氣と無邪気な向不見な処がない」（小宮豊隆、二葉亭全集第二卷）と物足りなさを述べる。漱石に対しては、「代助に『門野さん僕は一寸職業を捜して来る』と云う様な台詞を云わせるのは可哀そうだと思う」と徹底した無理解を示し、「要するに現実に対する彼（代助）の態度には優秀なる理智の批評と鋭敏なる神経反応とがあり乍ら高等なる情意の共同を欠いた」と指摘した。（次郎、「それから」を読む）その指摘の本意は恐らく「自然に逆ひし愚を悔ゆる心も亦明らかに描き出されている。併し代助は一方に三千代を棄てた当時の意志にその性格の不純を認めて昔の罪を恨悔する心がない」ということにあるらしい。つまり、「理智の判断に反抗する痛恨と嫉妬」「この苦しさを包む深さ」とが截りすてられたとするのは、それ自身、自然主義的な読み方である。「門」に対しては「宗助の現在には生活其者に対するイライラがない。不満がない。又お米を友達から取って果して幸福にしているかどうかという自省もない。（中略）毒氣のない善人な代りには深い反省悔悟がない。デットして居られない様な不安がない。自分は男としての宗助にお米などに持てないそういう

不安と不満をもつと鮮かに見たかった。」（宮本和吉、漱石氏の門を読む）とする。こういうものと対照的に、「如何に甘くかけていても漱石氏の『門』のようなじめじめした、生気を消してゆくような芸術を自分は愛することが出来ない。」（実篤、五月雨）という切捨て方も見られる。鷗外に対しては、「青年」の知的虚構を難じて、「語ること割合に豊であつて読者の心に泌むこと割合に乏しきは鷗外氏の作品である」（豊隆、七月の劇と小説）と一蹴する。このような高踏的な視野を、かれらに与えたのは翻譯文芸に養われた眼であつたことは疑いなく、「日本の文壇の屑々たる作品」という時、かれらは文字通り世界の子であつたのである。従つてかれらは海外文芸に高潮された精神を以て自国の文芸を見下したと同じく海外文芸そのものに対しても素直に躊躇うことなき批判を連ねたのである。その間の消息をトルストイに対する論調を以て一瞥しよう。

「トルストイの思想主張の当、不当は、兎に角、（傍点稿者）トルストイの實際生活が主張の實行であるかどうかによつて、寧ろ其価値は定まるものであると思う。」（能成、トルストイの思想）こういう発想から次のような弁難が派生する。「トルストイはモスクワを去つて、田舎に引込んで、百姓めいた生活をしている。が未だに立派な図書館を持っている処を見ると労働とはいふものの、その実精神を激しく働かした上の息抜きにやる遊びごととも見られると思う

それから位記や尊称を不合理なものだ、私有財産や金銭は個人の自由を奪うもので、他人抑圧の道具であると排斥して居ながら、自分は之を抛つことも出来ずに居るのはどういふ訳だろう。」長く引用するに耐えない裏長屋の噂話的漫罵が、思想の吟味に先行している。或はその思想よりも、それを達成するための思想への彷徨に共感して「長らくヤスナヤ・ポリヤナに隠遁して表面は平静に日を送って居たらしい杜翁が、終に我から居たたまらないで死期に先だつて何処其処の修道院などろついた揚句、鉄道線路に沿つた寒駅に命数を終へたと云うことは、わけて興味深く感ぜられる。翁が世に知られたる思索の上の矛盾、生活の上の矛盾を最後まで戯談として忌避しなかつた。最後まで安んじて居なかつた証左として、恰も此処に人間の代表者の大往生を見る様に、嬉しくも、又有難くも思う。」(草平、杜翁逝く)更に「現代のような古い偶像是打毀され、神秘は露き出しのまま投げ出されて信仰も希望も無くなつた時に出て来て、那の弱々しい女性的の思想―生活の否定、心霊の逃避といったようなことを説いたのだから溜らない、理智に疲れた一代の人心に染み込むのも尤もな次第だ」(泣菫、対話)これらの余りにも自然主義的な理解、問題の思想の厳格な検覈よりも、一種気のきいた消息通であることに安住する姿勢あるが故に多様な思想を包摂して(というより包摂したと誤認して)傷つくことのない文化

人でかれらはあり得たのである。「公明なる心を以てすれば何者か己の資けとならぬものであらう。」(秋骨、危険ならざる文学とは何ぞや)教養主義がこのような明朗性を身につけた時、教養は自らの安定を求める慘憺たる営易であるよりも、伝統思想と西欧的な近代思想の眞の自覺的な対決であるよりも、多彩な知的粉飾として、自身の空疎に目隠しする意匠として一の眞実な思想を獲得しようとする力を弱めたのであつた。

かれらは新しい文学に対してどのようなヴィジョンを持ったのか。その答の一つとして小宮豊隆は、近代の文芸に現われた人間の多くが個性を何処までも發揮しようとして強者の文芸である観があるが、それと共に「個性を没し得ざる寂味を描いた弱者の文芸」を期待している。(個性を没し得ざる寂味)又桐生悠々は文芸のみが独り文芸家の為の文芸であることを不可として、「国家国民のため」の文芸を要望する。(文芸の社会的使命)吹田蘆風は物質的運命的な人生観と対決する、現実と自我との争闘のうちに新しき理想を樹立する「新ロマンチズム」を提唱する。(新ロマンチズム)森田草平は、自然派の小説以来跡をたつた情調の復活を要請して三重吉の「小島の巢」や荷風文学の持つ情調ある文学を發展せしめよと説く。(近時の傾向)能成は人生に対する傍觀的態度を否定して、「人生を熱愛する人でなければ人生の深い大きな意味にまで潜り

入ることは出来ない。」として「人生の熱愛者によって与えられた文学」を渴望する。(人生の熱愛者) 実篤は「自己の生命を豊富にしてくれる文芸」、「灰色の人生を」「強大なる主観」を以て彩る文芸を待つ。

セルゲイ・エリセエフは、ザイツェーフに拠って「生を信頼し生を肯定する」文学が、近来の傾向であるとする。

(露国新進作家・ボーリス・ザイツェーフ) 自然主義の克服を図るものとして、寧ろ貧困なヴィジョンでしかないだろう。かれらのこの新しい文学への構想力の貧困は、ともすれば既成の文学に寄りかかって初めて発想されるという面を露呈する。文芸欄の評家たちは、その同時代文学現象である耽美派に対しても白樺派に対しても実に遠慮ぶかい批判しか出来なかったが、このことも上述の貧困の根に発するものであらう。享楽主義の根底にも「悩める現代の心」(次郎、再び自ら知らざる自然主義者)があるとして、享楽主義も「覚めたる観照的意義」を有するとする。或は快楽主義を単純に見るなとして「観楽を追う生活の真面目」な動機を認めよと述べる。(能成、観楽を追う心) 魚住が「観楽を追はざる心」を書いて、その逸脱をたしなめたのも当然な弁疏であった。白樺派に対しては、「パンを得る為めではなく、職業だからではなく、人に賞められんが為めではなく、唯自己の生命のため」にする文芸への期待から、自分の「自由を保留し愛着することの出来る」のは、

「下らぬ、人生に、触れる、ことに比べて、(傍点稿者)」望ましいことだ、という。(能成、文壇の高等遊民) 草平が、ドオデーの「サッホー」を論じてその女主人公が、「幾多の男に關係して、節操」ない売春婦でありながら「常に人情を以て終始して居る」ことを以て、人間の心の奥底にある「至純至簡の真心」があるとし、こういうものを描いた文学を期待した時(ヒュマニテイの文学)、能成がそのヒュマニテイを「我が国でいう義理人情」ではないといい、「忠義」といい孝行といい貞節という類の、唯社会的家族的の道德よりも、又人道といい博愛という所謂世界的道德よりも、内的生命の愛重ということ」を、「ヒュマニテの根本義」と指定したのは、かれらの内省主義の巧まぬ湧出であつたらう。この観念的な内観主義が「同じ問題を胸に懷き、同じ淋しさに眼をしばたたく人の間にのみ感応を求めを為に、なるべく難解の言語を用いて、野次馬と俗人とを文芸の堂外に駆逐したい」(次郎、通俗と難解)という俗衆への限らない侮蔑につながるのである。

記・朝日文芸欄からの引用には全て()を付して題目及び著者を示した。但し()のない引用は直前か直後のものと同一なものである。
(1967・10)